妻を在宅でカイゴして（第５回）

15年にわたり妻を介護している北海道・野瀬義昭さんの介護体験。「不自由な身であっても、よりよい環境で生活できるように」と、さまざまな工夫を凝らします。「人間らしく生きることを支える」—そんな介護をめざす日々が続きます。（全12回）

イラスト・井上ひいろ

寝たきりの和子が乗ったベッドは、やたらに大きく感じた。六畳間の大部分を占領してしまい、部屋はせま苦しく陰気くさい。わたしなりに病人専用に一部屋をと気づかったつもりだった。もともと、介護生活を想定して建築された住宅ではないので、どうしてもこうなってしまう。

自分の介護を見つめ直して

和子は自力で体を動かせないから、一日中、与えられた部屋の一方向と、天井とのニラメッコをしている。

この家を建ててから四〇年、和子は三人の子どもを育てあげ、私の父母を世話しながら、生活を切り盛りしてきた。それなのに、重度障害者になったために部屋に押しこめ、隔離したような生活にしてしまい、わたしは和子がみじめに思えてきた。もし自分だったら耐えられないだろう。

自分の介護は、和子を「人間らしく生きることを支える」ものになっていたのだろうか。人権問題として厳しく己を責めた。

居たい場所に移動できる環境に

和子が不自由な身だからこそ、「この家の主人公」にしなければならないのだ。そう思うと、わが家を見る目が一変した。和子とベッド、和子と車椅子を一体のものとして考え、ベッドや車椅子に乗った和子が、行きたいところに移動できる家づくりに着手した。

一階四部屋の間仕切りをとっぱらい床をフローリングにすると、まるで集会所のようだ。キャスター付きのベッドが、わが家の四方八方すべての場所に移動することができるようにした。晴天の時は窓際に、曇天や荒天の時は温かい壁際にと。和子は話せないので、その心の内をよみとって、一番気持ちよく居たい場所にベッドを移動させる。

ベッドがどの方向を向いても時計が見えるように、すべての壁に時計をかかげた。大型テレビにはキャスターを付け、ベッドの近くに移動させていつでもテレビを楽しめるようにした。寝たきり介護では、障害者の社会性をたもつために、視聴覚の刺激をあたえつづけることが重要である。

冬期の北海道は厳しい寒さだ。自宅では二つのストーブがフル回転し、燃料代がかさむ。わたしも、椅子の生活に一変した。基本的に畳やカーペットの生活に慣れ親しんできたので、フローリングの生活には、なじめなく辛いものがあった。

〝人間らしく〟支える介護を

ベッドと一体の和子を主人公にして、人間らしく生きることを支えるための環境が、己の心の問題も含めて苦労の末、いちおう整った。わたしは、従者のごとくベッドの周辺で生活することに、ほどなく慣れてきた。

（つづく）

ほっと介護 112